

三十九 もう一度のコペルニクスの転回

世界はこのわたしを中心に広がっている、と田夫は思う。毎朝内海の対岸から出て天をかけめぐり西に沈む太陽がじつは中心にあつて、この地球が太陽のまわりを周遊しているのだとコペルニクスに教えられても、自己中心的に考えることをやめられない。外のこととはわたしと関係がある場合にしか関心と呼び起こさない。ところが、カントが訊ねる、そう言う君は、君の外にある事物は現に存在していて君と関係をとりむすぶのだ、と考えているのではないか。それならどうして、その対象ではなく君が中心にいると言えるのか、と。問いただされれば、田夫はまごつく。哲人が、その事物はいつたいどのようなにして君の関心を引きつけるのか、とさらに訊いてきた。外のモノゴトが自分に都合がよいかどうかぐらいいいか考えない男は、そんなことを訊かれても答えようがない。すると、三の矢が飛んできた。そのリングが食べてくれと言ったのか、だいたいそれがリングというもので害をなさないとして君に分かったのだ。男はいよいよ答えに窮する。

情け深い哲人は助け舟を出してくれた。それは、君が理性をもつ人間で、直感的にモノを見分け、悟性を働かせてそれがどういふものか見通しをつけ、経験を重ね論理をつめて

確かな知識にするからだ。君の主観が、君に備わる能力によって、外部にある対象を君の認識にもたらすのだ。そうやって人間は、対象の客観的で確かな認識を得る。蛇がリングゴの落下をどう見ているのか分らないが、ニュートンはそうやって力学法則を発見し、地球が太陽を中心に周回していることを疑いようなく証明して見せたのだ。地球の上にいるわれわれは太陽のまわりを周遊しているのだが、人間は自分を中心に据える主観によってその認識に達するのだ。わたしは、客体から主観が教えてもらおうというそれまでの観点から、主観が客体を認識するという観点への逆転を、「コペルニクスの転回」と呼ぶ。もつとも、コペルニクスの地動説は、人間が自分のいる地球を中心に考えるのを放棄させたので、主客の逆転ということでは逆になっているから、君はここを混乱しないようにしなければならぬ。

君は、事物を考えるとときには自分を正しい位置に据えて、君に備わる能力を精いっぱい正しく用いなければならないのだ。だがもちろん、自己の利益を中心に置いて行動することには反省を加えなければならない。わたしの言う理性の「先験論的超越論的」な用い方による「批判」ということをよく考えることだ……。そこで田夫は考える、わたしはわたしの外部に事物があつて事象が現われるのを観ていて、わたしの内部で思考は自分の働きを意識している。まず、世界とわたし自身をよく識ること、それから…。

愚鈍な者は同じところからなかなか前進しない。そうしているとき、『我々はどのような生き物なのか』という書物が出版されたことを知った。とても意味深長な書名だ。しかも著者はN・チョムスキー、ビッグ・ネームだ。一九五〇年代、「生成文法」という革命的考えによって言語学を一新して以来、その方向の研究をリードしている人である。その著作の一つをかじったことがあるけれども、文法を数学のように論理的に論じる部分を理解するのはむずかしいから、わたしは「生成文法」論を十分了解できていない。だが、こんどの書物は講演を文字にしたらしいから、理解しやすいだろう。書名に表現された著者自身のものと考えられる設問からも、理解の深まる場所があると期待できる。

人間が生まれてまもなく言葉聞き分け話せるのは、言語の普遍文法と呼ぶべきものを生得的に備えているからだ、とチョムスキーは考える。人間を生き物としてとらえ、言語を生得的なものとするのは、具体的に表現すれば、身体に言語の構成をつかさどる器官もしくは処理機構があると仮定することである。チョムスキーは、人類の進化の途上で、そういう変異が起きて言語のシステムがつくりだされた、と推定している。

たぶん最後になるだろう来日講演を、要約して理解しておくことは意味があるだろう。

チヨムスキーは、構造主義的言語学を開拓したソシュールに敬意をもっていたそうだが、まったく異なる視点から言語に向き合うから、言語を論じる言葉はおのずと違うものになる。観念と音(身体表現をむすびつけることを「言語の発明」と呼び、人間だけが「言語の感性を獲得した」と言う。そして、「階層構造をもつ表現の無限の配列」、「基本原理をみたとす計算手続き」……などの言葉が出てくる。しかし、言語を「思考の道具」としてとらえる基本的な考え方から離れることはない。デカルトやW・フンボルトなどを引用し、「言語の使用は、その及ぶ範囲に限界がなく、状況によって因果的に引き起こされるものではない。自分自身も同じように表現したのである」と認識できるような思考を他者の中に生じさせることができる…」と、言語の創造的な働きに注目する。

言語学者の課題は、一世紀前のイエス・ペルセンという人の提起していた問題を探求することだ、とチヨムスキーは考える。すなわち、「言語の構造がどのようにして話者の心に存在するようになるのか」そのメカニズムを発見し、「全ての言語の文法の根底に横たわる大原理」を見出して、「人間の言語と人間の思考の最も深奥にある本質に対するより深い洞察」を得ること。それを、現代的に「心と行動における他の諸側面とのインターフェイス、内的諸言語においてそれらを関係づける生成手続」の研究と定式化し、「生物学的枠組みにおいて生成文法をとらえる」ことを課題とする。

チヨムスキーの思考は現代科学の方法に準拠する。また、分析哲学の流れを汲む人は、統語における語の配列を論理的「演算」のように考える。そこで、言語に対して、「二つの要素XとYから新たなZをつくる併合は」というような、集合形成の演算を考えることになる。さらに、言語は自然の中で生まれたという洞察から、言語が自然の一般法則である「最小計算の原理」(物理学に出る極小原理)に従う、と考える。そこで、言語の文法を考察すると、「併合」の演算は最小の線の距離のような演算ではないから、「言語は最小の構造的距離という特性を使用する」と表現する。言語は、「要素がすでに構築されているなら、その構造に依存した規則にしたがうことになる」のである。

それは生物学的枠組みにおいて考察されるので、脳内に「言語の構造」に対応するものがある、つまり、言語の特性は脳内の神経回路の組み立て方や働き方からくることになる。内的言語による思考に対して心的過程のための概念インターフェイスと、言語を表現にもたらず音声や手の動作に外在化するための感覚運動インターフェイスが、脳内にあるはずなのだ。チヨムスキーは、「脳内のほんのわずかな再配線が、限界がない創造的な思考のための基盤をもたらした」、その変化が、「現生人類をその祖先から、そして、動物界における他のあらゆる生物から区別した」とさえ言う。そして、実際に、適合的なデータが

神経科学的な知見にあると見ている。

こういう言語学は認知科学や情報の科学などと関連し、チョムスキーが始めた企ては、二十世紀の後半から切り開かれてきた広い意味の認知科学に大きなインパクトを与えた。今後それらの探求全体がどのように進展するにしても、「生成文法の企て」が枢要な位置を占めることになるだろう。以上が、言語の構成原理を再考したチョムスキーの講演を読んだわたしなりの受けとめである。

それを読んでいた途中でわたしの脳に閃きが走った、チョムスキーの企ては「もう一度のコペルニクスの転回」だ、と。カントは、彼の言うコペルニクスの転回によって、人間の外部に生じる事象は主観に観点を据えることで認識できるのだと明らかにしたが、当時はまだ、彼が宇宙の形成を論じたようにには主観を学的必然性のもとに研究することはできなかった。しかし今や、科学が発展し、人間の内部で起きる事象も学的な研究対象にできるようになったのだ。もう一度のコペルニクスの転回で、外部も内部も三百六十度の全周を展望できるようになるのだ、と思った。ウィキペディアを見ると、似たようなイメージを喚起された人がいたらしい。酒井邦嘉という人が、チョムスキーを「一人の人が天動説と地動説の両方を作り上げるようなものである」と評しているそうだ。

だが、よく考えてみると、わたしの最初のイメージは事態を十分精確にとらえていない。全体を展望している視点はどこにあるのかと訊ねてみれば、どこか外部から世界の事象を客観的に観る視点があるわけではない。人間は、理性の「超越論的(先験論的)」使用によつてはじめて認識を達成することができる。わたしは、「先験論的」に考える主観を通して全周を観ようとするのだ。やはり、カントの理論理性批判を超えることはできない。そして、「脳内の配線」とそこでの「自然の原理」に従う演算が精神の働きを生み出すとすることは、「先験的感性」と「先験的論理・範疇」も、それに基づく理性の「先験論的」使用も、自然法則の運行＝事物の運動に支えられているとすることだろう。主観を通して世界を認識するのだが、主観の認識は「世界の運動法則」によって成立するのである。強く言えば、客観的な世界が在って主観を支え、主観は世界を観る、という循環をなしているのだ。世界の外も始原も知ることのできないこの循環を生きて、わたしは、主観という視点に絶えずもどりながら、世界と自己を探求することだけができる。

こうして、自己の外部の事象を事物性と法則性において認識するように、自身の内部を事物性と法則性において認識することが人間の理論的課題である。チョムスキーの企てが提起しているのは、神経回路でなされる思考や言語をそういう事物性において研究することである。その研究は、外部に対する自然科学の探求と同じように、一步一步前進するほ

かにない。だから、簡単に認知のしくみが解明されることはないだろうし、脳の神経回路に対応づけて言語のシステムがどこまで説明できるようになるかもまだ分からない。たどこまでも背進を続けることが人間にできることである。

もう一度のコペルニクスの転回による眺望は平面的ではない。言語を脳内のシステムに対応させて考えることは、人間の脳を進化の過程としてとらえることでもある。言語や思考の事象は、これまでの外的事象に対する生物学の延長上で人間の内部に入りこんでくる。そこからもう一度外部に出て、人間の外部にある社会的な言語という事象をとらえなおすことになる。その意味で、従来の言語学とチョムスキーの提唱する言語学は逆の方向性をもつ。この双方向は平面的なものではない。

同じように人間の精神と行動を考えれば、人文学も、人間の外部の事象が内部からの機制も受ける複雑で立体的なものとなる。社会科学でも、人間の外部と社会に現われる思考と行動の理解に新しい観点が加わることになるのだろう。主観にとつての「先験論的批判」の課題は立体的に大きく広がり、わたしは、人が全天を仰いでいたころのように全球を探求するのだが、大地を深く耕すように自己を耕し探求する者としても在るのだ。

田夫である園丁は、果樹や野菜と親しみ天候の計りがたいことを知って、自分が世界の中心にいるのではなく、自然の一隅で生きていることを識る。そしてそこで、世界と自己を見つめる。リンゴを味わい、リンゴからもう知恵で何事かをなそうと思う。

二〇一六年、地球の公転の節目、春分

『我々はどのような生き物なのか』という書物は、もう一つの講演も収録している。それを無視したら、N・チョムスキーがどういう人かを理解することはできない。

「人間がどのような生き物か」という問いは、理論理性だけに向けられるのではない。チョムスキーは実践理性をおろそかにしない。カントが知的な関心を宗教や社会に向けさらに発言したように、チョムスキーも現代の社会的な問題に発言してやまない。二日目の講演「資本主義的民主制の下で人類は生き残れるか」が、その方面の考察と活動の一端を教えてくれる。

「社会的な存在である人間は、社会的、文化的、制度的状況に決定的に依存する」とする人は、それらについて考えるのが当然だと言う。そして、言語学者の先達フンボルトの言葉、「人間がその多様性を最も豊かに示す形で発展することこそが、絶対的にかつ本質的に重要なことである」を掲げる。この言葉をJ・S・ミルが『自由論』の巻頭で最上位の指導原理としたことを紹介して、自らの依って立つ古典的リベリズムの中核的原理だとする。さらに、道徳哲学者としてのA・スミスも同じ立場に立っていたと指摘し、この原理にたがう現在の経済動向を批判する。チョムスキーは、啓蒙の時代にまで立ち返って、そこを立脚地として社会的な問題に迫っていく。じつのところよく知らないが、マルクス主義に批判的で無政府論的な思想に親しんだという人は、後代の左翼的な思想でない思考を意識的に選択しているのだろう。

啓蒙の時代をリードした人たちには今日の社会がとんでもないものに見えるだろう、とわたしも思う。現代の政治・経済を支配する勢力の不正を、チョムスキーは厳しく非難する。その批判はときに精確さを欠いているように見える。論争をいとわない人は、すでに高齢になって何とかしたい思いがつのり、言いたいことがありすぎてこの短い講演では整理できないほどのだろう。現代社会は極めて技巧的に組み立てられている。カントは宗

教の因習を批判する発言を皇帝の書簡の形式でさしとめられたが、チヨムスキーは支配的なメディアや出版社の無視によってその影響力を殺がれている。齒に衣着せぬ発言はもどかしい思いの表われだろう。われわれの社会は、知性ある人を寛容に受け入れてその意見に耳を傾けるとまのないほど忙しく、技巧的すぎて中身のない状態に陥っている。